安土城考古博物館見学記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳生, 俊樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2878

安土城考古博物館見学記

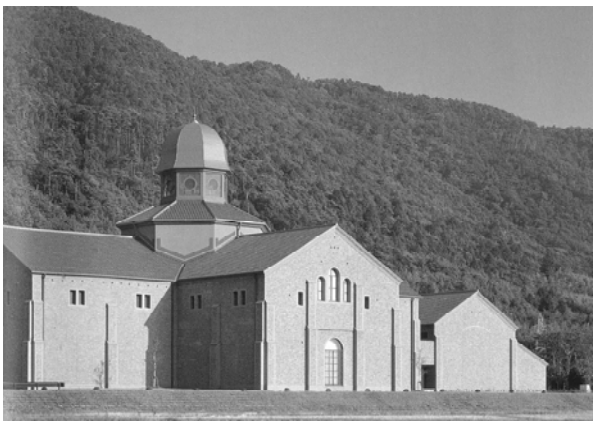
修士2年　柳生　俊樹

今回の見学実習の最後の目的地が、滋賀県立安土城考古博物館である。小雨の降る中、予定より遅れ16時過ぎに到着。館前での記念撮影後、見学に臨んだ。幸運にも、学芸員の方に解説していただけることになっていたが、今回、我々を迎えてくださった北村圭弘さんは、金沢大学文学部考古学コースの卒業生である。

安土城考古博物館は滋賀県蒲生郡安土町にあって、その名の通り、織田信長の居城、安土城のお膝元である。安土城だけではない。博物館の周辺地域は、非常に歴史的意義の深い土地柄である。博物館の東隣には六角氏の

巨大な山城、観音寺城もある。さらに、その南に瓢箪山古墳、北に大中の湖南遺跡（弥生時代）があって、古代から近世にかけての多くの史跡に恵まれており、考古・歴史系の博物館の所在地に相応しい。安土城考古博物館はこうした環境の中で、文化財の調査・研究、各種の学習のための拠点として幅広い活動を展開している博物館である。

常設展示スペースは、二つのセクションに分かれている。先にふれた史跡群にちなみ、1）大中の湖南遺跡と瓢箪山古墳とを中心とした弥生・古墳時代をテーマとする第1展示室、2）観音寺城と安土城を中心に城郭をテーマとした第2展示室、3）遺物の調査・整理作業を見学できる回廊展示、がある。



滋賀県立安土城考古博物館　全景

第1常設展示室は、室内の左右でそれぞれ弥生時代、古墳時代の二つに分かれている。弥生時代コーナーでは木製農具・銅鐸等が展示され、復元図や人形を駆使し、当時の農耕社会の生活の様子を紹介している。古墳時代コーナーでは、滋賀県内最古で最大の前方後円墳である瓢箪山古墳の石室の実物大模型や各地の古墳出土品（馬具・武器・装身具など）の実物や復製品の展示があって、日本史上における滋賀県の位置を示している。学生たちの中でも、弥生時代、古墳時代に関心を持つ者はかなり多い。各自の関心に沿って、展示物の前に足を止めていた。

第2常設展示室では、中世から近世に至る城の歴史がテーマとなる。地元観音寺城や安土城の調査成果、織田信長の人となりに様々な角度から迫った展示が素晴らしい。入り口左手上方に、戦国時代城郭の「砦の門」の復元模型があって目を引く。キャプションによれば、越前朝倉氏に伝わる『築城記』（中世城郭築城の教科書）に依った、とのことである。安土城だけではなく、小谷城関係の展示もあって、 一通り見てまわることで中世から近世にかけての城郭に関する知識を得ることができる。

回廊展示では、出土品の調査整理・復元作業を中庭に面した回廊から見学できるというもの。考古学研究の、現場の一端を垣間見ることができるわけである。 閉館時間ギリギリであったためか、作業の様子はあまり見られなかったがこのような試みは興味深いものがある。

ところで、第2常設展示室の中央には3種類の長槍の複製品が置かれていた。そのうちの1本は、一体どうやって使うのかと思うような長大な槍で、信長軍の装備と伝えられるものである。この長槍をめぐって、数人の学生の間で、ちょっとした議論が展開された。

思わず手にとってしまうが、当然のことながらかなり重い。これを構えるとなると、相当の労力であったに違いない。あまり実用的とは言えそうにないし、「実戦用ではなく儀礼用では？」「文献の誇張を真に受けた誤りだろう」「城に攻め寄せた敵を刺すには長いほうが好都合だ」といった意見が出された。

このような長槍の使用については、私の研究テーマと重なる部分もあるので、興味を引かれる。時代も地域も大きくかけ離れるが、西アジアの事例を参考に、この長槍について考えてみよう。

西アジアでは、パルティア・ササン朝時代に製作された「騎馬戦勝図浮彫」が多数知られている（註1）。
騎馬の帝王が長大な槍で敵を叩き落とす、という勇壮な光景を描くものである。また、図像以外にも、ローマ時代の文献に、パルティアやササン朝の重装騎兵についての記述がある。この時代、従来からの弓矢を中心とした軽装騎兵に加えて、人馬ともに甲冑に身を固め長槍を持った重装騎兵が出現し、戦場の花形となっていたのである（註2）。

イスラム以前の西アジアでは、まだ鐙が知られていなかった。そのため、長槍の重装騎兵の威力について、疑問視されることもある。鐙なしでは、敵に激突した際の衝撃を十分に吸収できない（註3）。馬上で長槍を効果的に操ることができないわけであるから、帝王騎馬戦勝図など文字通り絵空事である、と。

しかし、馬上で長大な槍を操ること自体に、戦士的勇気が見出されていたのではないか。ローマ側の記録によれば、長槍を持った重装

騎兵が戦場で活躍していたことは事実である。重装騎兵自体は、決して絵空事ではない。技術的な理由によって、重装騎兵の威力を軽視するのは誤りであろう。むしろ、技術的に困難であることが重要なのではないか。ある技術の習得が困難であればあるほど、習得した者への畏怖の念は増すことになろう。であるとすれば、重装騎兵の威力についても、物理的なものと同時に、心理的なものもあったのではないかと考えられる。

ここで、もう一度、信長軍の長槍に戻る。扱いにくいからと言って、単純に、不正確な復元であるとか、実戦用ではない、といった断定もできまい。極端に長大な槍を装備すること、それ自体に重要な意味があったかもしれないのである。私は、以上のように考える。

さて、最後に、印象に残った点について書いておこう。ここでは、復元図や人形、模型、実際に手に取ることのできる複製品を駆使した展示が多いことが、特に印象に残った。遺物は、かつて作り使われた各種の道具・物質文化の「化石」である。従って、遺物を残した人々の、生活・文化・社会的なコンテクストに照らしてこそ、その遺物の歴史的な意義付けができるわけである。遺物が、ガラスケースの中に並べられただけでは、単なる鑑賞の対象、骨董品でしかなくなってしまう。見学者に展示品の持つ意味や重要性を正しく伝えるためには、こうしたものの活用は大きな意味があると思われる。残念ながら、時間の関係で、少々慌ただしい見学ではあったが、有意義なものであった。また、卒業生の活躍の一端に触れることができたのも、大きな収穫であろう。

註

１）深井・田辺1983:120-139参照
２）相馬1977
３）だからこそ鐙があったはずだ、という主張もある（増田1970:155）。しかし、今のところ、実物・図像ともに知られていない。

参考文献

相馬隆1977「胡騎考----安息の騎兵に就いて」
『流砂海西古文化論考』（山川出版社）
深井晋司・田辺勝美1983
『ペルシア美術史』（吉川弘文館）
増田精一1970「パルティア・サルマタイ」
『漢とローマ』護雅夫編（平凡社）pp.152-178